

資料紹介

寛文八年銘元立院窯飴釉仏花器について

山下 廣 幸

(本館 学芸課長)

1 はじめに

慶長3（1598）年、豊臣秀吉の命により朝鮮に出兵（文禄・慶長の役）した島津義弘に連れ帰られた陶工達によって薩摩焼は始められた。慶長4年開窯の串木野窯に始まる苗代川系、慶長6年頃の開窯といわれる宇都窯に続く豎野系、またこれらの窯に若干遅れて開窯する八日町窯に端を発する龍門司系が、薩摩焼の主流を形成していく。

ここに紹介する仏花器は、これらの朝鮮陶工の手によって始められた薩摩焼とはその発生を異にし、寛文3（1663）年に開窯した西餅田系元立院窯の製品である。

2 作品の形態

この仏花器は、高さ14.6センチ、直径10.4センチあり、ラッパ状に開いた端反りの口を持ち、次第に胴部が締まり、流れるような蕪形の腰部を形成している。高台はやや台形に広がり、畳付きは糸切りされている。器体に残るロクロ目や糸切りの形から左回転のロクロによって形成されたことが分かる。手どりは、一般的な元立院の作品がそうであるように、ずっしりした感じのするものである。

胎土は、白っぽい磁器質のもの（元鹿児島県工業試験場長野元堅一郎氏から、元立院の粘土と龍門司系山元窯の化粧土を混合したものではないかとのご教示を得た）で、鉄の酸化焼成の発色による飴釉が掛かる。器体に残るロクロ目に沿って釉のたまが見られるほか釉の濃淡があり、飴釉が一様に掛かっているわけではない。

また、口から首にかけての一部に底辺約5センチ、高さ約5センチの逆三角形の欠損部があり、補修されて彩色が施されている。

ラッパ状の首部の表に「□田井手之口権現御寶前敬白」、裏に「寛文八年十一月吉日 帖佐」とヘラ書きされ、畳付き糸切り中央部に「元立院」とこれもヘラ書きされている。

3 作品の由来

この仏花器は、アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメント在住のミュージーラー夫妻から寄贈を受けたもので、夫人の父ウィルリアム・レオナード・シュワルツ氏が収集されたものである。同氏は、明治43（1910）年から大正3（1914）年まで第七高等学校の外国人英語教師として鹿児島に勤務された。ちなみに、祖父のヘンリー・バトラー・シュワルツ氏は、宣教師として日本各地に赴任しており、鹿児島にも滞在していたことがある。薩摩焼に大変興味があったらしく、この作品のほかにも慶田窯

や陶弘山窯の錦手の茶器、香炉、文房具など質の高い小品を収集している。しかし、この作品のように薩摩焼の中で「黒薩摩」に分類されるものは、この1点のみである。さらに、窯場を訪問したときの様子や古い薩摩焼の作品を写したアルバムやガラススライドも残っており、当時の薩摩焼に関する興味深い情報を得ることができる。さらには、『薩摩の陶工と陶器』(THE POTTERS AND POTTERY OF SATSUMA)の論文を「JAPAN SOCIETY : TRANSACTIONS, Vol. XIX, 1921」に発表しており、これらについては稿を改めて紹介する予定である。

また、鹿児島在住の間、大正3年の桜島大爆発にも遭遇しており、この時の様子を撮影したり、あるいは関連の写真を集めて「桜島大爆発ガラススライド」を作成し、アメリカ各地で上映会を開催したことも知られている。なお、この「ガラススライド」一式全70枚は、平成5(1993)年4月当館に寄贈されている。

4 元立院窯の歴史

「元立院窯」という名称は、帖佐(鹿児島県始良町)の西餅田にいた修験者小野元立の名前に由来し、窯のあった地名に因んで薩摩焼の中では「西餅田系」に分類される。修験者は古くから島津氏によって大事にされ、修行のために全国を廻国しており、政治の動き、各種技術などに関する最新の情報を得る立場にあった。

『加治木舊傳書』に所収される「元立院関係文書」(以下関係文書と略す)は、現在『薩摩焼の研究』(昭和19年刊、田沢金吾・小山富士夫著、p285~291)で見ることができる。この内「小野元立諸事控書(自寛文二年至同三年)」によると、元立院窯創立の由来は次のように記録されている。「今度思立焼物細工細工打出申ニ付細工人相尋申候ニ付山ケ金山加籠金相尋申候へハ周尾之國北村傳右衛門と申人を尋出し焼物細工の咄委細聞合申候へハ彌細工人別條無御座候由ニ付……」

これによると、元立はある時焼物を製造することを思い立ち、山ケ金山(山ケ野金山)や加籠金(鹿籠金山)で焼物のできる技術者を捜している。この時期は、苗代川では元屋敷窯から堂平窯に移り、豎野では冷水窯で色絵の研究が始まり、龍門司では山元窯が築窯される4~5年前に当たり、薩摩焼全体が軌道に乗る時期で、各地の窯で盛んに焼物が生産されつつあったと考えられる。焼物の技術者と金鉾山の技術にどのような関連があるか良く分からないが、例えば地質を見る目や鉱物を採掘する技術などが関係するのであろうか。このような技術者を捜し出す努力の結果、元立は山ケ野金山にいた周尾(防)国の人で、肥前の焼物の技術を持っていた北村傳右衛門を見出し、そしてロクロを取り寄せたり、製陶の原材料の調査、あるいは調整をさせたりしている。

また、関係文書「小野元立諸事控書(自寛文三年至延宝五年)」に「寛文三年二月廿日夕釜屋普請ニ取付候事」とあり、この時に築窯したことが分かり、さらに「同年四月五日ニ釜始仕候皆々抱り茶碗壹ツ出来申候條箱へ入召置候事」から、初窯ではわずかに茶碗が1点しかできず、見事に失敗している。この時の細工人は、「田之浦之瓦作小右衛門立野の兵吉長門國櫻木長左衛門宮之城之岸良彌兵衛と申者此四人之弟子ニ而候事」とあることから芳珍の孫小右衛門を始め4人の者であった。

寛文4(1664)年には、川野相雪に始めて焼物を進上し、翌5年には川野相雪を通じて藩主に焼物12種を献上しており、立派な焼物ができるようになったことがうかがえる。延宝5(1677)年になると、

元立は藩窯の細工人と同列に位置付けられている。

さらに、関係文書「小野元立宛伊東伴五兵衛書状」には、「一 延宝八年申ノ八月五日ニ焼物御奉行伊東伴五兵衛殿の被仰渡候覚書留 商売焼物細工手廣く仕御分國中御國焼物ニ而相遣し以来者他國江も遣候様ニ有之度被思召上旨上意候其通ニ可相調与奉存候様各相談候而可被申出候左候ハ御物座江も其首尾可申上候上意重奉存間成程□儀可仕候 以上 申八月五日 伊東伴五兵衛」とあり、国元はもとより他国へも販売できるようになり、窯場がある程度盛況を呈していたと思われる。

以上のように、寛文8年頃は元立院窯の生産も盛んになり、安定して製品が販売されるようになった時期と考えられる。この窯は、延享3(1746)年に5代小野元立などが龍門司に移り、廃窯となっている。

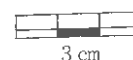
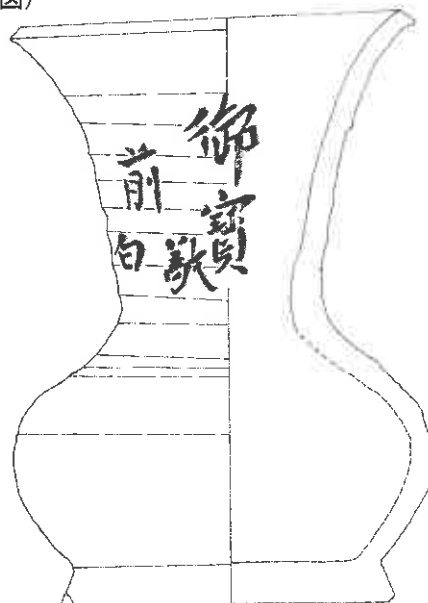
5 若干の考察

寛文八年の銘を持つこの仏花器は、元立院窯もいよいよ軌道に乗り、分窯の小松窯が寛文10年に築窯されるなど最盛期を迎える頃の作品である。現在のところ、元立院窯の作品で紀年銘を入れたものは確認されておらず、しかも築窯後5年程度の早い時期のものである。元立院窯初期の作品の胎土、釉、ロクロなど技術的な解明をはかるうえで貴重な作品と考えられる。銘文から何かの祈願、あるいはお礼のしるしとして神前に奉納したものであろう。

「井手之口権現」については、鹿児島郡吉田町西佐多浦の字名に井手ノ口を確認でき、この字の内にあった権現ではないかと推定できるが、実際にここにあったかは判明できなかった。しかし、吉田町は元立院窯のあった始良町とは接しており、井手ノ口と元立院窯のあった西餅田は直線で8 km以下と、それほど遠くない。このことから、ここでは銘文の判読を「吉田井手之口権現」と推定しておく。

また、龍門司系統の山元窯の発掘品や加治木町の旧家に伝わる「飴釉茶碗」の磁器質の胎土、ロクロ目の残る製作技術、釉の調子など類似した特徴が多くみられ、元立院窯と山元窯あるいは龍門司窯、さらに磁器窯の弥勒窯との関係などを今後明らかにする必要がある。

(実測図)



(写真)



「権現 御寶前 敬白」



「□田井手之口」



「寛文八年十一月吉日 帖佐」



「元立院」